

南海トラフ巨大地震の理解に向けた古文書調査

山中 佳子

理学の社会貢献の一つは想像の最大限の震源域から不確実性の高いものを外し、確実に考えなければならない震源モデルを提示すること
 そのためには

- ・巨大地震の連動性
 - ・津波地震の発生条件
 - ・微動発生域と巨大地震アスペリティとの関連
- などを明らかにする必要がある。

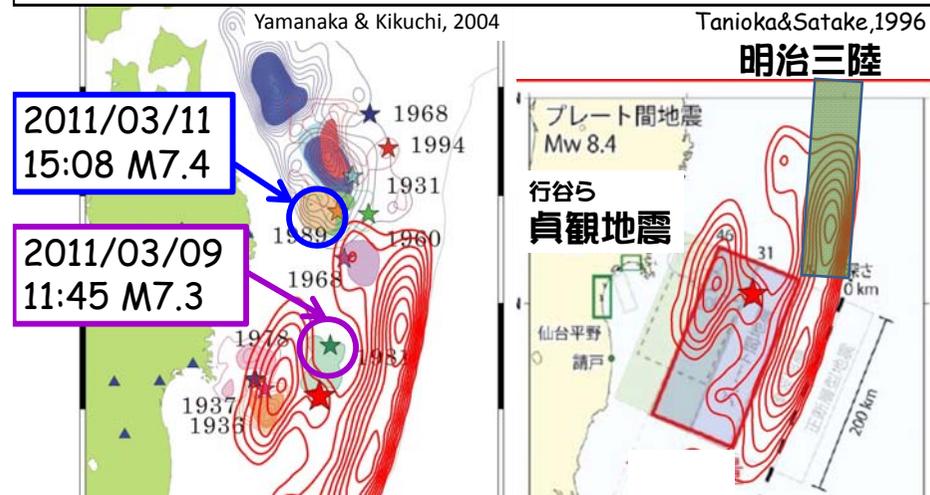
その一つの手法として

ある程度理解できている昭和の地震と古文書史料とを比較して過去の震源モデルを解明する。

本プロジェクトでは

- ・新たな古文書の発掘
- ・これまでに発見された史料の地球科学的整理
- ・過去と昭和の地震の比較

東北では過去の地震アスペリティとの比較



2011年東北地方太平洋沖地震でも過去に滑ったアスペリティが再度滑っていることがわかる。
 →南海トラフでも過去の震源過程を理解する必要あり!

地震調査委員会、南海トラフ長期評価

・歴史地震の震度分布



・簡単に多様性ということて片付けていいか? もう少し言えることがないか?
 ・震度分布、津波高の曖昧さに注意が必要
 ・同じデータでも解釈は人それぞれ。多くの人が見る必要あり。

特徴が異なっている(多様性)

宇佐美(2003)、松浦・中村(2010)に基づく

最近見つかった史料: 日記にみる地震情報 安政南海地震

十一月六日 晴少しツ、時雨中小地震折々
 ゆすり誠ニ双方困入候事

十一月五日 時雨折々
 今日も折々中小地震ゆる
 七ツ時大地震入ル地震口
 上南西方大筒之ことく鳴ル

御用日記 安政元(1854)年十一月五日条

(中略)

一名古屋坂吉右衛門、嶋田元三郎、其外とも今朝引取之事
 一今朝方小地震時々不相止処、七ツ過如 昨之大地震又候震り
 候処納り候也、時郷烏帽子嶽辺之方角当之空ニ面大筒
 之如くどんく〜と鳴、雲空鳴事甚敷、其後追儘成咄ニ者
 大地震ニ面海鳴候事、大坂既ニ大津浪ニ面人大イニ死ス